

今回の話を始める前に、いささか複雑になってきた問題を整理しておこう。

(1) Un étudiant est venu te voir ce matin. — Ah, bon. Qu'est-ce qu'il disait ?

「今朝学生が君に会いに来たよ」「そう、{その学生/\*彼}何だった?」

「彼」がおかしいのは次の理由によるのだった。フランス語の il / elle は「コトバをさす記号」であり先行詞を受けるが、日本語の「彼/彼女」はコトバを通さず直接に人をさす記号である。言い換えると、il / elle は「言語的コントロール」を受けるが、「彼/彼女」は「語用論的コントロール」を受けるので「コトバをさす記号」ではない。(1)の二番目の話し手は留守していて、やって来た学生に会っていないのでその学生を知らない。「彼」は知らない人はさせない。また「彼」は「コトバをさす記号」ではないから、一番目の話し手の発言の中の「学生」を先行詞とすることができない。だから「彼」は使えないのである。前回こういう話をした。

フランス語の il / elle が「コトバをさす記号」であることは、次の例を見ればはっきりする。

(2) Personne ne reconnaît la faute qu'il a commise.

「誰も{自分/\*彼}の犯した過ちを認めようとしなない」

personne は否定表現だからさしている人はいない。il はこのように、該当する人がいなくても使えるのだが、その理由は il が「コトバをさす記号」だからである。日本語訳で「彼」が変なことも確認していただきたい。このように il は personne のような否定表現も先行詞にできるが、おもしろいことに同じ否定表現でも rien は先行詞にできない。

(3) \*Rien n'a été déplacé pour qu'il soit davantage au soleil.

「もっと日が当たるように移動されたものは何もない」

この事実を指摘した Tasmowski-de Ryck という言語学者は、なぜだかわからないと不思議そうに書いているが、理由は明白である。この連載の第2回目(5月号)でお話したように、「ヒトはコトバの世界では特別」だからである。personne は人をさすことが決められているので、あらかじめカテゴリー化が済んでいる。ところが rien はモノをさすのでカテゴリー化が済んでいない。il は「コトバをさす記号」だから、カテゴリー化が済んで文法的性が決まったものしか受けられないのである。ここにもコトバの世界ではヒトとモノは同じではないという証拠がある。

強勢形人称代名詞はヒトをさす

さて、強勢形の人称代名詞はモノをさすことが難しいということを前回お話した。

(4) Je te passe un crayon. \*Ecris avec *lui*.

「鉛筆を貸してあげるから、それで書きなさい」

その理由は、ふつう人称代名詞は「コトバをさす記号」だが、強勢形に限り「ヒトをさす記号」だからなのである。il / elle のような代名詞も強勢形の代名詞も区別なくいっしょくたにして「人称代名詞」と呼ばれているが、実は強勢形は働きがまったくちがう特別な代名詞だと考えたほうがよい。

(5) [パーティーの人混みで、ある人を指さして]

*Lui*, c'est le petit ami de Marie. 「彼はマリーの恋人だよ」

(6) [セーター売り場で、あるセーターを指さして]

\**Lui*, c'est un beau pull-over. 「これはすてきなセーターだ」

(5) の *lui* は指さした先の人をさす。しかし(6) の *lui* は指さしたセーターをさすことができない。このような場合には、*lui* ではなく、指示代名詞の *ça* か *celui-ci* を使わなくてはならない。

(5) で *lui* には先行詞がなく、外界の人を直接にさしている。これが可能なのは上にも書いたように、言語が扱う森羅万象のうちでヒトは特別な地位を占めていて、あらかじめカテゴリー化が済んでいるためである。カテゴリー化が済んでいると、あらためて言語化してコトバで呼ぶ必要がない。だから上の例で *lui* が男性形になっているのは、何か隠れた男性名詞と一致しているのではなく、さされた人が男だからという単純な理由による。(6) ではモノが話題になっているので、まだカテゴリー化されていないと話し手が考えたら *ça* を使う。*ça* には性の区別も数の区別もなく、カテゴリー化以前のモノをさすことができる。話し手が自分の頭のなかで対象を pull-over とカテゴリー化を済ませたら *celui-ci* を使う。このとき男性形の *celui-ci* になるのは、pull-over が男性名詞だからである。

コトバの世界とコトの世界

ここで次のような反論がすぐに出るだろう。強勢形は常にヒトをさすわけではなく、次のようにモノをさす用法もあるではないかという反論である。

(8) Mais ma lingerie, *elle*, reste en haut ?

「(設計図を見ながら) 私のシーツ・タオル類置き場はやっぱり2階なの?」

確かにこの例では *elle* がモノをさしていることは明らかである。どう説明すればいいだろうか。

この問題を明らかにするには、コトバの世界とコトの世界の関係に目を向けなくてはならない。フランス語は全体として、コトバの世界がコトの世界にたいして優位を占める言語である。言い換えると、コトバの作り出す世界の独立性が高いのである。次の例を見てみよう。ある新兵の自殺を報じる記事から取った。

(9) *La recrue* avait eu avec son commandant de compagnie un long entretien à l'occasion

duquel **elle** s'était confiée à lui.

「その新兵は指揮官と長時間にわたって話し、指揮官に心を内を打ち明けていた」

代名詞 *elle* は女性形だが、問題の自殺した新兵は男性である。なのになぜ女性形の *elle* を使っているかということ、先行詞 *la recrue* が女性名詞だからである。つまり、代名詞 *elle* は **コトの世界** に属する男性の新兵を受けているのではなく、**コトバの世界** に属する *la recrue* を受けている。このように、コトバとコトが競合したとき、フランス語ではコトバの方が強いのだ。もっともこれは原則であり、日常の話し言葉のフランス語では、ふだんは日陰に回っているコトが表に出ることもある。次の例では男性名詞の *le ministre de l'Éducation nationale* を女性形の *elle* で受けている。大臣の職に就いているのが女性だからである。余談ながら、最近では *la ministre* という言い方がふつうになったので、このような性の不一致の問題はなくなった。

(10) *Le Ministre de l'Éducation nationale* est en vacances. **Elle** séjournera deux semaines au bord de la mer.

「文部大臣は休暇中だ。彼女は海辺で二週間過ごすことになっている」

(8) の例では先行詞 *ma lingerie* が強勢形 *elle* の直前にある。これは先行詞が言語的コントロールを及ぼしやすい場所である。こういうとき、フランス語ではコトバの方がコトに勝つ。だから「強勢形はヒトをさす」という制約がこれに負けてしまい、モノである *ma lingerie* を先行詞とすることができるのである。このようなコトバがコトに勝つケースは次の例にも見られる。歩哨が男性兵士だからといって、コトを優先して *il* で受けることはできない。ここでも先行詞 *la sentinelle* は代名詞の直前にあり、強い言語的コントロールを及ぼすからである。(10) と比べてみればちがいははっきりしている。

(11) *La sentinelle, {elle / \*il} n'a rien entendu.* 「歩哨は何も聴かなかった」

コトバが勝つフランス語とは対照的に、どうやら日本語はコトの力のほうが強い言語らしい。その証拠に「あの建物は何ですか」「あれ/\*それは学生寮です」が示すように、コトの世界である現場が話題のときは、一度登場したコトバ「(あの) 建物」を先行詞として「それ」を使うことができず、そのたびごとに現場のコトをさす表現「あれ」を使わなくてはならない。日本語はコトの世界に縛られていて、コトの世界からコトバの世界に移行するのがなかなかむずかしいのだ。文法の領域に語用論が侵入しているというのが日本語の姿である。

さて、最後に難問が残った。人称代名詞の系列のなかで、なぜ強勢形だけがヒトしかさせないのかという疑問である。この問題は、主語や直接目的語の代名詞は動詞とくっつけて使うのに、強勢形は名詞と同じように独立に使われるということと関係している。「私のグラスを割ったのは誰だ」という問に、ある人をさして *Lui*. とは言えるが *\*Il*. とは言えない。このとき指さし行為が必要なことがポイントだ。単独で使えて指さしが必要ということは、強勢形は指示代名詞と働きが似ているということの意味する。強勢形を指示代名詞の一種と考えると、いろいろな疑問が氷

解する．強勢形はヒト専用の指示代名詞なのである．一方，主語や直接目的語の代名詞は動詞とくっついて，動詞にたいする役割を表わす機能が基本で，何かをさすのは二次的機能である．このことが動詞とくっつけて使う代名詞と，強勢形のように単独で使える代名詞のおおきなちがいだと考えられる．

(とうごう・ゆうじ)